

# 京劇

## ■ 京劇という呼称

「京劇」という名称が定着したのは1949年の新中国建国以降である。それ以前は、二黄(二簧)、皮黄(皮簧)、京戲、京劇、平劇(北京が北平と改称されていた時代の呼称)、国劇など様々な呼称で呼ばれ、一定しなかった。また、北京民衆の俗語では、京劇を「大戲」(「戲」は芝居の意)、京劇以外の土着の地方劇を「小戲」と呼んだ。日本語では昭和中期まで「京劇」をケイゲキと読んだが、今はキョウゲキと読む。

## ■ 京劇の歴史

1790年、乾隆帝の80歳の祝賀のとき、安徽省から来た4つの劇団「四大徽班」が北京で公演し成功を収めた。のちに湖北省から進出した俳優たちも合流し、安徽と湖北の地方劇を基礎としつつ、崑曲(現在の「昆劇」)や梆子など他の地方劇の要素を吸収し、19世紀前半に北京で京劇の基礎が形成された。清末には、社会不安の増大と比例するかのように京劇の人気上昇し、名優が輩出した。民衆だけでなく、咸豊帝や西太后など清末の統治者も京劇に夢中になった。

京劇は清朝に生まれたが、舞台衣装は明朝以前の漢民族の服飾文化を基礎とし、演目も儒教的価値観を鼓吹する歴史ものも多く、近代中国の民族意識覚醒の時流にも乗った。また、北京の京劇が正統派であるのに対し、上海の京劇は娯楽的な新作を量産するなど、地域差も生まれた。

民国期に入ると、京劇の観客層は若者と女性が増え、若手の女形だった梅蘭芳が絶大な人気を博した。彼は京劇の改革や海外公演を行ない、国際的な名声を得た。民国期から女優も京劇の舞台に立つようになった。

中国共産党は、毛沢東や周恩来らが京劇の愛好者であったこともあり、延安時代から京劇の改革に力を入れ、旧来の京劇脚本の整理改編や、楽器の改良、新作の創造、京劇俳優養成学校の改革などを進めた。新中国では、京劇改革を文芸改革の要とする意向のもと、全国各地に京劇団や、



京劇の諸葛孔明の扮装(俳優は魯大鳴氏)。



清朝時代の劇場のにぎやかな様子を描いた絵。

複数の京劇団をあわせた「京劇院」が作られ、名称も「京劇」に統一された。文革の導火線となった新編歴史京劇『海瑞罷官』や、文革中の模範劇の1つに指定された現代京劇『紅灯記』などの新作も続々と作られた。文革が本格化すると、京劇俳優は迫害を受け、伝統京劇の上演も禁止された。文革後、伝統京劇は復活したが、今日では映画やテレビなど他の大衆娯楽文化との競争にさらされている。2010年、京劇はユネスコの世界無形文化遺産に登録された。

## ■ 京劇の特徴

本来の伝統京劇は、緞帳や幕は使わず、舞台装置は「一卓二椅」(机ひとつ、椅子ふたつ)だけである。また、京劇俳優は「唱(うた)・念(せりふ)・做(しぐさ)・打(たちまわり)」の四技能を要求される。役柄は、男性役「生」、女性役「旦」、隈取りの豪傑役「浄」、道化役「丑」に分かれる。昔は「旦」も男優が演じたが、現在は例外を除き旦は女優が演ずる。

京劇の音楽は、二黄や西皮、曲牌など既存の伝統的メロディーを使い回すほか、新曲を書き下ろすこともある。楽器は、京胡や月琴、三絃、京二胡などの旋律楽器(文場)と、単皮鼓や檀板、銅鑼、鑊鈸などの打楽器(武場)が基本である。

伝統京劇のセリフは、帝王宰相や才子佳人などが喋る古雅な「韻白」と、庶民役が喋る下町言葉「京白」、田舎言葉「方言白」に分かれる。韻白は、中国人も字幕がないと理解できない。現代京劇のセリフや歌は、中国人は耳で聴くだけで完全に理解できる。[加藤敬]